# 井の頭池 水鳥繁殖増

## かいぼりで水質改善

## 「本来の生態系 戻れば」期待

都立井の頭公園（武蔵野市、三鷹市）の井の頭池に生息する水鳥・カイツブリ[図]の繁殖が盛んになっていることが、認定NPO法人「生態工房」（武蔵野市）の調査でわかった。池では水を抜いて水質を改善させる「かいぼり」を実施しており、在来種のエビや小魚などの餌が豊富になったことが要因とみられる。関係者は「本来の生態系に戻れば」と期待を寄せている。

エビを捕まえ、ヒナに食べさせるカイツブリのペア
（2017年6月13日、井の頭池で撮影）＝八木さん提供

[図] カイツブリ　小型の水鳥で全国に分布。水に潜って小魚などを捕まえる。湖沼で草などを積んで「浮巣」を作って繁殖。初夏になると、ヒナを背中に乗せて泳ぐ姿も見られる。

八木愛さん

井の頭池のかいぼりは、水質浄化と外来種の駆除を目的に2013、15年度と2回実施。先月末からは3回目が始まり、13、14日は池の生き物を都民らが捕まえ、外来種と在来種により分けるイベントが行われる。

同園で野鳥の調査などを行っている生態工房では、2回のかいぼり後の16、17年の繁殖期（4～8月）にカイツブリの調査を実施。17年は6つがいの繁殖行動が確認されて33羽のヒナが誕生しており、16年を13羽上回ったという。

かいぼりによりオオクチバス（ブラックバス）やブルーギルといった肉食の外来魚が減少。カイツブリの餌となるエビ類やモツゴなど小型の在来魚が増加したことが、繁殖数が増えた要因とみられるという。

同法人職員、八木愛さん(29)は「餌のレパートリーも増え、カイツブリにとってより餌を得やすい環境に変わってきた」と分析。「ただ水辺に生育するヨシなどの植物が不足しており、カイツブリが身を隠しながら子育てできる環境はまだ整っていない。今後も継続的に調査していきたい」と話している。

## 水草再生 今後も可能性

かいぼりにより水質が改善した井の頭池では2016年、絶滅危惧種の水草「イノカシラフラスコモ」が約60年ぶりに復活。専門家は「池底の泥を巻き上げる外来魚が減ったからでは」と分析している。

約60年ぶりに井の頭池で復活したイノカシラフラスコモ

都によると、イノカシラフラスコモは1957年に新種として井の頭池などで発見されたものの、その後姿を消していた。調査に当たった東邦大学の西広淳・准教授（保全生態学）は「水草を食べたり、池底の泥を巻き上げたりする外来種のコイが減ったことで、水草が発芽しやすい環境に変わったことが復活の一因」と解説。「かいぼりで時々でも池の環境が良くなれば、土中で眠る水草の種が発芽することもある。水草再生の可能性は後世まで残る」とかいぼりの意義を語る。

東邦大の西広淳・准教授